

活用事例紹介 **大阪市浪速区**

浪速区を、大阪を、そして日本を本当に好きになってもらいたい。

大阪市のほぼ中央に位置する浪速区は、通天閣のある新世界やポップカルチャーで盛り上がる日本橋でんでんタウンなど、魅力的な観光スポットが数多くある。同区は2015年2月に発行された「浪速区観光ガイドブック」を「MCCatalog+」を利用し、多言語配信している。「MCCatalog+」利用の経緯などについて玉置賢司区長と市民協働課武内真一郎担当係長に話を聞いた。

浪速区は関西空港からのアクセスが良いので訪日観光客に来ていただきやすいエリアにもかかわらず、これまで彼らに向けた情報発信が不十分でした。大阪に来る訪日観光客の5割は東アジアの方なので、情報発信するには英語だけでなく中国語や韓国語への対応も必要です。その点、「MCCatalog+」は日本語版のデータをそのまま使って多言語化と電子配信が同時にできるので、限られた予算の中でメリットがとても大きいと思います。専用のアプリを使ってスマートフォンで閲覧できるというのも魅力です。フットワークの軽い個人旅行者はスマートフォンで情報収集します。彼らにしっかりと魅力を伝えることは、大阪のファンになってもらい二度三度来てもらう上で大切な取り組みと考えます。「MCCatalog+」を活用し多言語で観光情報の発信することで大阪の文化を啓発し、浪速区を、大阪を、そして日本を本当に好きになってもらいたいと思います。



浪速区は関西空港からのアクセスが良いので訪日観光客に来ていただきやすいエリアにもかかわらず、これまで彼らに向けた情報発信が不十分でした。大阪に来る訪日観光客の5割は東アジアの方なので、情報発信するには英語だけでなく中国語や韓国語への対応も必要です。その点、「MCCatalog+」は日本語版のデータをそのまま使って多言語化と電子配信が同時にできるので、限られた予算の中でメリットがとても大きいと思います。専用のアプリを使ってスマートフォンで閲覧できるというのも魅力です。フットワークの軽い個人旅行者はスマートフォンで情報収集します。彼らにしっかりと魅力を伝えることは、大阪のファンになってもらい二度三度来てもらう上で大切な取り組みと考えます。「MCCatalog+」を活用し多言語で観光情報の発信することで大阪の文化を啓発し、浪速区を、大阪を、そして日本を本当に好きになってもらいたいと思います。

読みやすさを追求した書体
ファーストステップに最適

同社はいまから90年以上前に紙の印刷物を制作する写真植字機を発明した。現在はデジタル書体（フォント）の開発や販売などが業務の中心だが、創業以来、常に情報発信に関する技術や商品、サービスを提供してきた。デジタルブック事業には6年前から進出し、ブラウザ上で見やすいフォントなども開発、現在では約180誌のデジタルブックが同社のツールを使って配信されている。

堤氏は「ユニバーサルデザインに準拠した見やすいフォントや美

お問い合わせ



株式会社モリサワ

〒162-0822
東京都新宿区下宮比町2-27

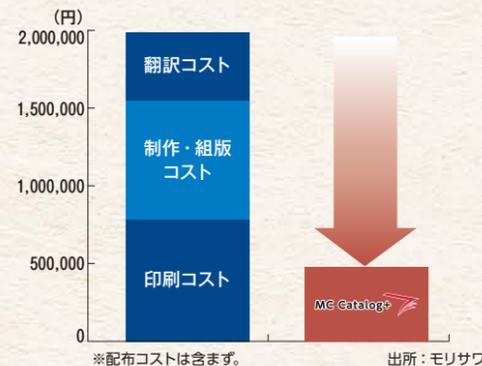
TEL 03-3267-1378

URL <http://www.mccatalog.jp>

複数媒体の多言語化で
コスト効率はさらに向上

実際に日本語の印刷物をベースに英語版、韓国語版、簡体字中国語版、繁体字中国語版の4種類を印刷した場合と、「MCCatalog+」を導入した場合とのコストを比較したのが図表②だ。さまざまなコストが発生する印刷物に比べ、「MCCatalog+」は年間48万

【図表②】「MCCatalog+」導入6カ月後のコスト比較



円の定額なので、複数の印刷物を多言語化すればするほど、コストパフォーマンスは高まる。「管理画面上で、実際にどのページやコンテンツが最も読まれたのかを検証することができます。今後、本格的な訪日外国人向けコンテンツを制作する際にその情報を生かせば、効率的に外国人のニーズに合った印刷物をつくることもできます」(堤俊二氏)

しくレイアウトする組版、デジタル配信といった当社の技術に、自動翻訳の世界で多くの実績を持つ高電社の「翻訳クラウド」を融合させることで、「MCCatalog+」は誕生しました。これは当社にしかできないツールと自負します」と話す。

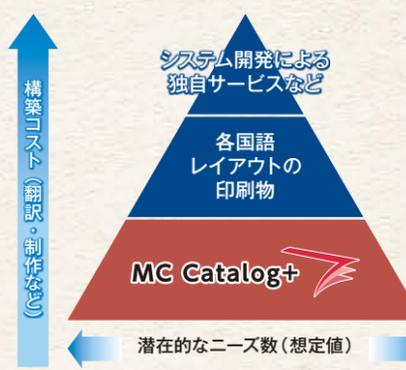
多言語対応の音声読み上げ機能なども新たに装備され、ますます利便性が向上している。今後はさらなる言語拡張も予定しているという。インバウンドマーケティングのファーストステップとして、「MCCatalog+」を利用するのは賢明な判断といえそうだ。

日本語情報を自動翻訳し
ポップアップ画面で表示

地方自治体の広報誌や地域ガイドブック、ホテルやゴルフ場の施設案内、料理メニューなど日本語の印刷物があれば、それを多言語対応のデジタルブックとして配信できる画期的なツール、それがモリサワの「MCCatalog+」だ。日本語印刷物を制作した際のデータ(主にPDFデータ)さえ用意すれば、同社の専用ソフトでその中の文字情報を抽出し、自動翻訳エンジンと連携させて指定の外国語に翻訳する。出来上がった

デジタルブックデータを専用の閲覧アプリで開き、日本語のテキスト部分をタップすれば、翻訳された言語がポップアップ画面で表示される仕組みだ。自動翻訳は英語、韓国語、簡体字中国語、繁体字中国語の4言語に対応している。同社の小野大輔氏は、「インバウンドに向けた情報発信にこれから取り組む自治体や観光施設、ホテルや店舗にこそ『MCCatalog+』の活躍の場があります」と話す。すでに訪日外国人観光客が顧客の大半を占めていけば、外国語に対応した印刷物などがあるだろう。しかし、顧客の中心は日本人だが、折からの訪日ブームで外国人観

【図表①】「MCCatalog+」が活躍できる領域



光客が急激に増えてきたという場合はどうだろうか。情報発信が必要なものにもかかわらず、対応が後手に回っている自治体や店舗は多いはずだ。とはいえ、多言語語に対応した印刷物を新規で作るとすれば、その言語ごとに翻訳やレイア

一方、「MCCatalog+」なら日本語で作られた印刷物さえあれば事足りる。自動翻訳なので翻訳コストはかからず、デジタルブックなので印刷費も不要だ。修正作業なども必要に応じて行える。「MCCatalog+」導入の最大のメリットは制作コストを安く抑えられる「点にあります」と小野氏は力を込める(図表①)。

ウト、印刷の費用がかかる。在庫をストックしておくスペースも必要になるし、情報が陳腐化すれば、改訂版をつくる必要もある。それだけのコストを掛けて制作しても、実際に読んでもらい、集客につながるかはわからない。

日本語の印刷物を手軽に多言語化
デジタル配信で制作コストを削減

海外からの観光客が増えているけれど、多言語に対応した情報発信が間に合っていない。そんな悩みを持つ自治体や企業、ホテルなどに朗報だ。既存の日本語の印刷物をベースに、コストを掛けずデジタルブックで多言語配信できるツールが誕生した。開発したモリサワの担当者に話を聞いた。



株式会社モリサワ
コンテンツプロモーション課 課長 堤 俊二氏 (右)
コンテンツプロモーション課 係長 小野大輔氏 (左)